

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授受認雜誌第三五二號
昭和二十四年八月廿日印刷
昭和二十四年九月一日發行

第十五卷

第九號

浄土

九月號

青夏秋暮

吉田絃二郎

一所不住

佐々木孝丸

初秋に生きる美

早見君子

ソ連の子供の悩み

佐藤密雄

忍 終 不 悔

苦しい時は早く苦を脱れたいと思う。苦しいから信仰を求め
悩みが多いから宗教を求める。まことに尤もなことである。

自轉車を初めて習う。すぐ落ちる。乗る。また落ちる。落ち
るのと乗るのと、たえず繰り返している。乗つてゐる距離が延び
てゆく。次にはどれだけ走つて落ちるのか分らない。しかし望
みは失なわれない。落ちることの繰り返しの中に、いつか乗れる
ようになる。いつ、どの瞬間からなのかは分らない。失敗の突
破、成功への轉回、いつしか與えられたのである。

近年盛んに説かれる實存哲學で、ヤスパースは、挫折し失敗
しながら、どこまでも挫折失敗の立場をもちつゞけているうち
に、いつか失敗、挫折を突破して向う側へ抜け出ている、失敗
が成就であり、挫折が突破である、と言うことを説いている。
苦惱の中にあつてどこまでも望みを失わず、どんなに苦しくと
も、どんな悩みでも、ゴマかすことなく耐え忍んでゆく。そう
すれば、いつか終りは、いつ來たと言うこともなく來り、救済
の喜びと感謝に變つてゆく。これが信仰である。信仰は苦惱の
底に光をみつめて歩む力を與える。

たとひ身をもろもろの苦毒の中におくとも
わが行、精進して忍びて終に悔ひじ

とは大無量壽經の一句である。こゝに信仰者の態度がある。終
りまで忍ぶものは幸である。(藤田寛雅)

目 次

ソ連の子供のなやみ	佐藤密雄(22)
自己を信ずる	中野尅子(10)
苦の眞實	藤田寛雅(7)
野分(詩)	鳥居良禪(3)
老人訓	相馬愛藏(19)
一所不住	佐々木孝丸(4)
青夏秋暮	吉田絃二郎(1)
騒音の中の尺八	喜熨斗謹也(12)
強清 水	竹中信常(14)
五平と青ノ市	吉田宣成(17)
信 仰(詩)	町田トシヨ(10)
初秋に生きる美	早見君子(20)
會友の聲・芝園だより	



青夏秋暮

吉田 絃 二 郎

多磨の田圃を歩いて行くと、稲の間から鵲が鳴いてゐる。わたくしは立ちどまつて鵲を聴く。鵲の聲は澄んでゐて、あはれである。

いつも田の中に草を採つてゐる人たちと青田一二枚をへだてゝ、くゝくゝと誰れかを呼んでゐるやうな聲で鳴く。

雲雀は麥畑の中から高く大空に舞ひ上つて鳴くが、鵲は低く青田のなかに身を隠して鳴くさへあはれである。

時として鵲は稻田の畦などに姿をあらはして、きよとんととして、あたりを眺めてゐることがある。

鵲を聴けば亡くなつた母を思ふ。母は寂しい人であつた。母はよく鵲の話をしてくれた。大庄屋の一人娘として育てられた母ではあつたが、何故だか母は寂しい人であつた。母が幼いわたくしに鵲の話をしてくれたのは、

母自身鵲のさびしい鳴き聲に惹きつけられてゐたのかも知れない。

芭蕉翁は

父母のしきりにこひし雉子のこゑ

とうたつたが、芭蕉翁には雉子の聲に、父母を思ひ出す過去の何かゞあつたのであらう。

鵲の鳴く音を聴けばわたくしは、しきりに母をこひしく思ふ。

曠い平原がひろがつてゐた。目ちのかぎりは青い稻田であつた。夕暮れの田には人の姿も稀であつた。母はわたくしの手を取つて田の畦に立つてゐた。鵲が鳴くごとに母はわたくしの耳にさゝやいて「鵲が鳴く」と言つた。わたくしは自分の人生に對して何の望みも持つてゐない。

たゞもう一度、母と二人で鶴の聲を聴きたいと思ふ。

秋の風が吹く。秋の風を聴けば俳諧寺一茶ではないが「死に支度致せ」一といふさゝやきを感じる。

朝まだき渡り鳥の群が、庭の辛夷（こぶし）の赤い實をついばみに來てはさわぐ。寢床の中にゐて渡り鳥のさわぎを聴いてゐると、そこにも秋のわびしさはある。そこにも一死に支度致せ致せ一のさゝやきが感じられる。

鳥といふ鳥は何故だか人にきらはれる。病人がある家などでは殊にきらはれる。鳥鳴きが悪いなどといつて、鳥の鳴き聲を氣にする。まんざら、迷信ばかりでもなささうな氣もする。

が、それはそれとして鳥はきらはれ鳥にちがひないが秋になれば鳥も亦、詩中のものとなり畫中のものとなる。

芭蕉の「枯れ枝に鳥のとまりけり秋のくれ」の一句によりてわが俳諧は眞に蕉門の道を拓き俳諧のさとりを開眼したのであつた。鳥の功德大なりといふべきであるが實は秋そのものの功德である。

啞々として枝上に鳴く鳥も秋の大氣につゝまるれば、おのづから寂寞化される。秋になればもはやきらわれる鳥でなく、「死に支度致せ致せ」をさゝやく鳥である。人の心をいら立たせるいたづら鳥でなく、鳥自身が寂寞に

啼く、鳥となるのである。

このごろは都會近くでは蓮の花を見ることも少くなつたが、今でもまだ田舎の古い寺に行けば、小ひさな寺であつても池があり、初秋のころにもなれば池には蓮の花がかをつてゐる。

山門を入つて問へば住持は他出。留守は阿彌陀さまと池の蓮のみである。それでもお寺に詣でた甲斐はある。じつと阿彌陀さまの慈眼を拜み、蓮の花を觀じてあれば千萬無量の佛さまの御聲が聞かれる。

寺に池を掘り、蓮を植ゑたのは朝々に佛さまに奉る供養心のあらはれであらうが、衆生にとりてはまた一死に支度致せ致せ一の悟りの機縁でもある。池を掘り、蓮を植ゑてくれた昔の人の心をありがたく思ふ。

大正の頃であつた。不忍池を埋めて運動場にせよなどと主張した大學教授などがあり、戦時中は蓮を掘り採つて稻を植ゑたりしたが、今度ふたゝび蓮が不忍池に植ゑられるとかいふ話を聞いた。とかく心田の荒れた人間は功利的一面からのみ物を見る。不忍池に稻を植ゑ三百俵の米を收穫したが、實際に稻を植ゑた人たちに分配されたところは僅かで、大部分の米は一部の人々の懐を肥やす横流れの品となつたといふことが新聞に載つてゐた。あの美しい楚々たる蓮の花を埋めて米を取らうとする考への裡にすでに濟度しがたい提婆の心が潜んでゐた。

ウイリアム・モーリスは或る時、友人といつしよに倫敦のテムズ川にボートを浮かべてゐた。

そのころはまだテムズ川には沙翁時代を想はせるやうな美しい水と、水禽の群と静寂と古雅とが取りのこされてゐた。モーリスはテムズ川のよさをしづかに味ひつゝ、ボートを漕いでゐた。

すると、突然そのころ發明されたばかりの小蒸汽船をテムズ川に走らせて來た男があつた。小蒸汽船は波を蹴立て靜かに眠つてゐた水鳥の夢を破つてしまつた。それは同時にモーリスの懷古的な夢を破つた。

多感なかれは、その蒸汽船を見るや、怒り心頭に發すといふ態で、ボートの底が抜けはしないかと思はれるほど、強く靴先でボートの板を蹴り、蒸汽船目がけて一馬鹿野郎ツ！一を浴びせかけた。

美しい人生を樂しまう、美しい生活を樂しまう、美しい祖國を大切に守つて行かうといふモーリスの熱意は、またわたくしたち日本人のものでなければならぬ。

この祖國の美しいものを粗末にするとところに末世的な世相がある。

モーリスは或る時、或る人の家に泊めてもらつたが、その家の細君がとても非美術的なカーテンを窓にかけてゐた。翌日の朝、モーリスが發つて行つた後で、その細君は窓のカーテンが取り棄てられてあるのを見た。

日本の美を忘れた近ごろの人たちはモーリスの美に對する鋭い良心と感覺を思ふべきである。

野 分

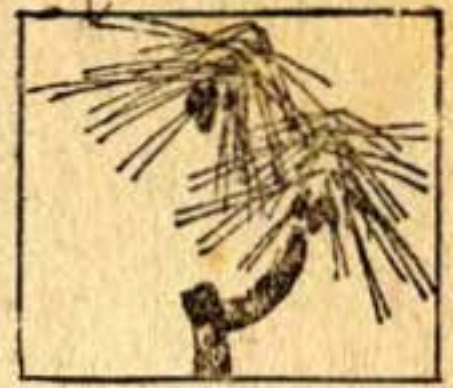
鳥居良禪

青銅の風鈴に色褪た短冊が結んであつて
それに良寛の歌がしるしてある
夏の雨はいく度かその墨痕を洗ひ
紐の紫を奪つたが

白萩の花の亂れる北方の廂に
それは荒涼たる野分の風と共に鳴つてゐた

お な じ く

荒涼と露しげる墓地を過ぎて行つて
さびたブランコを見付けた事があつた
若い尼僧が靜かにそれを揺つてゐて
傍に山畫顔などがこぼれてゐたが
野分のころになると そのありかも叢の道も
芒の穂の中に消えて行つた



一所不住の徒

佐々木孝丸

久里濱へ移つてから、ちようど三年になる。その三年の間に、三度住所を變えた。一つ所に平均一年づゝいた勘定になる。今いる家も、永住の家ではないし、いつほかのところへ引つ越すかわからない。いや、格好のところがあり次第、移りたいと思つてゐる。

いまだき、家に不自由している話などは、ちつともめずらしいことではないし、引揚者や戦災者で（私も戦災者だが）私などよりずつと窮屈な不自由な所に寝起きしている人もすくなくない。

だが、私の場合は、戦災にあつたために住所を轉々してゐるというだけではなく、一生涯、流轉の生活をするべく運命づけられてゐるようにさえ思えるのである。

私が東京へ出てから、終戦の年の五月二十五日に、井の頭沿線の西永福で、焼夷弾のため丸裸にされてしまふまでに、三十年の歳月が流れているが、それまでに二十五回住所を變えている。計算してみると、一ヶ所に平均一年半弱ずつしかいなかったことになる。ふりかえつてみると、よくもよくも、引越しばかりして歩いたものだ、われながら呆れるほどだ。

東京へ出る前には、神戸でまる三年半暮したが、この、まる三年半、四十二ヶ月の間に八回、下宿をかえてゐる。だから、神戸では一ヶ所に平均五ヶ月強しか腰を据えていなかったわけだ。

東京では、最初、芝園橋の近くで、しもた家の二階をかりて、友人と自炊生活をした。それが、私の東京生活のス

タートで、それから澁谷、赤坂、雜司ヶ谷、代々木、中野高圓寺、千駄ヶ谷、下落合、麴町、吉祥寺、西荻窪、西永福という順序で轉々としたわけだが、同じ地域で又何邊も引つ越している。雜司ヶ谷で三度、代々木で二度、高圓寺で二度、下落合で二度、麴町で二度、吉祥寺で五度、西荻窪で二度といった具合である。

(5)
友人の中には、私のことを、引つ越しマニアだなどというものもあるが、私は決してマニアではないつもりだ。私だつて、落ち着いて安住のできる自分の家というものがほしい。大體が、不精者なので、大掃除とか、引つ越しさわざとかいうものは苦手である。なるたけなら、そういう煩わしいことは一切、よけて通りたいたちなのだ。それなのに、かくも頻繁に引つ越しをしなければならなかつたというのは、私自身の都合というよりも、多くは他から強いられる場合の方が多かつたのだ。が、根本には、私が貧乏であつたし、今も貧乏であるということに最大の原因が横たわつてゐる。私が金持ちで、或いは金を作るだけの才覺の持ち主で、一生定住出来る自分の家というものをたてるだけの甲斐性があつたならば、次ぎ次ぎと追い立てをくつたり、逃げ出したりしないでもすんだ筈だからだ……。

こうして、一生の半ば以上を流轉のうちに過し、ことに戦災ですつぽりまるはだかにされた私は、ちゃんとした自分の家をもち、戦災をもまぬがれて、ぬくぬくと暮している友人知己などを見ると、羨ましくなつたり、癪にさわつたりしてくるのだが、この頃では、一種の負け惜しみの哲學をあみだして、このバカげた感情をおさえつけるようにしている。

「一所不住」ということと、「一所定住」ということとの間に、どれだけの違いがあるだろうか……絶對的なものなどは少しもない。「不住」といい、「定住」というも、要するに比較の問題なのだ。毎日のように新聞のどこかに刷られてゐる「浮浪人」ということば——彼らと私との間にどれだけの違いがあるだろう？

上野地下道の浮浪人は、地下道を追われてから、上野驛玄關前や、公園の銅像附近に「一夜のねぐら」をかえた。地下道は彼らにとつて、終戦以來の「安住の地」だつたのだらうが、そこを追われて、驛の構内で夜露をしのぐのと、私が、他人の家の一室を借りて、どうにか夜のねぐらを得てゐると、本質的には何の違いもない。その私と、自己

所有の家屋に「定住」している人たちとの間にも、やはり何のかわりもない。「永劫」の目から見れば、誰も彼もが、みんな「浮浪人」なのだ……と、これは私の負け惜しみ、しかも、平凡きわまる負け惜しみ哲學だ。

負け惜しみは一つある。どうせ、百年と生きていられるこの世ではないし、自分の家をたてて、一つ場所で、こじんまりちぢこまつて過すよりも、日本中を（世界中とまでは行かないまでも）自分の家と心得ている方が、氣持がひろくとして良いではないか——そうも思うのである。

といつてもこれは、「八紘をもつて宇となす」態の征服慾ではなく、その反對に、運命のなすがままに委せようというきわめて消極的な受け身な態度なのだ。

私は、どこで死んでもいいし、墓はたててもらわなくてもいいと思つてゐる。不自由な生ま身の肉體でさえ、一生轉々として歩いたのに、四通八達、融通無碍な魂だけになつてから、狭苦しい墓石の下などにとじこめられてはやりきれない。魂だけになつたら、それこそ全宇宙を、思いのままに放浪して歩きたいのだから……。

これは一所不住の僧にて候

多少とも謠曲なぞに親しんだ者なら、殆ど無意味に聞き流して了ふ位、これは陳腐な言葉である。併し考えればこの句は奇妙に魅力をもつてゐる。この句はその時の氣分により二様の響を漂はせて来る。多少とも感傷的な氣持になつてゐる時、この言葉を聞いたり想ひ浮べたりすると、妙にもの淋しい哀愁を帯び、何處にも定住の地、安息の家をもたなく、生への妄執によつて三界を輪廻する人間の悲しみに響く。

ところが、ある時の一所不住の僧は、去るものを追はず、來るものを拒まず、送らざるなく、迎へざるなき徹底した自由人を想わせる。杖の指すところ、足の趣くところ、刻々に新たな世界に朗らかに生きてゆく徹底人の境地が、この言葉によつて語られている。何れの姿もが、ともに眞實である。(F)

早見君子氏 早見美容院を經營され、斯界での第一人者として全國の女性に知られた方。

中野尅子氏 愛知で一味會を主宰、信仰運動を永くつづけられてゐる。

喜鬘斗謹也氏 市川小大夫丈の長男、新進劇作家。

苦の眞實

念佛申す様は生れつきのまゝ

にて申すなり 法然上人

藤田 寛雅

「朝から腹が痛い。どうも調子のちがう痛みに、ヘンだなと思いたがら、がまんして寝ながら本を讀んでまぎらしていた。その本が、レマルクの『凱旋門』という小説で、外科醫の主人公が氣味の悪い大手術をする場面が、はじめから終りまで連續している。腹の痛みは盲腸だということになつて、とうとう手術をすることになつたが、考えてみると、何だか、あのような本を讀んだのがシンをなして、自分が手術台の上でうめかねばならないことになつたような氣がする。大體こんど移つた家が火葬場の近くで、靈柩車の出入りするのをイヤでも見かけたことなども、連想されてきて、病床に横たわる私の頭の中に糸をひいて浮んでくる。」

(7)

誰もがこれに類した考えは、多かれ少かれ、病氣にでもなつたようなときにもつた經驗があると思ふ。之は何時だつたかN畫伯が隨筆に書いていた一節なのだが、私たちは身近い人の死とか、事業の失敗とか、長い病床生活だとか、思いがけないイヤなことに逢つた

とき、その苦しさ、悲しさから何とか脱れたいと苦しむ。どうにもそれがならないことであつても、何とかなりたいと苦しむ。ところがそうした苦惱の中で多くありがちなことは、苦惱に堪えつゝ、それを超えて前方に光を感じてたゞかつてゆこうとすることよりも、むしろ逆に後ろ向きになつて、いまの苦しさ、悲しさに連るもろもろの過去の偶然の糸をたぐりよせて考えては苦惱をふかめ迷つてゆくのである。そんな時であらう。家の方角がどうの、年廻りがどうの、ひどいものになると猫を殺した祟りだとか、いう様な類のことを聞かされると、早速それが、いまの自分の運命に最も大きな翳を投げかけているかのようと思ふ。手術の出てくる小説をよんで、自分も手術を受ける運命を迎えたかと、思ふのと同じであり、健康な、——心の健康なものにとつては馬鹿げたことなのである。

私たちが人生の途上で何か大きな障害に、挫折にぶつかつて惱み苦しむその底に何があるだらうか。想えばそのときこそ私たちは人生のふかい眞實に、人間性の本質に直面している時なのである。人間の弱さ、罪、運命、どういふ言葉で現わしてもよいだらう。これこそ自分の道だと、調子よく胸を張つて闊歩して來たその道が、突如ガラガラと崩れて暗い深淵がボカリと口を開けたとき、私たちは今まで變ることのない道だと思つていたことの、胸をはつて意氣揚々としていたことの、何と果敢ないものであつたかを知る。人生に於ては老いてゆくことえの淋しさ、病むことの苦しさ、死えの悲し

み、いやそうしたことでもなくとも、日々を生きてゆくことにさえ、多くの苦しさがある。無常とか、盛衰とか榮枯とか、いつた言葉は言葉として知つてはいるが、その無常に、その衰に、枯に直面してなほ、之が眞實である、と勇氣をもつて面をあげてたゞろぐことのない歩みを進めることが出来るだろうか。臆病な私たちの眼は、人生の底にある深淵にのぞむことを避けたいと思ふ。灰色の霞が、それが悪魔のヴェールであつても、ひととき私たちの眼を蔽つてくれることをむしろ願ふのではなからうか。溺れるものは薬もつかむ。一本の薬をつかまうとするそのことさえ既に人間の弱さを言つてゐる。

この間、再び名人位をかちえた木村名人は、將棋の勝負は勝とう勝とうという氣持で勝負にのぞんだのでは、みだれが來てしまつていゝ勝負が出来るものではないし、却つて敵に乗ぜられる機會にもなる。そうではなくて、いかにしてよくたゝかうか、いかに自分の全能力を發揮して正しくいゝ勝負をするか、なかでも悲境のどん底にたゝきおとされても決して悲観しないで常に冷靜な判斷下に適切な決斷を下すと言うことが大事だ、常に人は一生修業であると言つてゐるが至言だと思ふ。私たちはとかく何かに當つて目前のあせり、みだれから人生への正しい判斷を曇らせてしまひ勝ちである。

よくあることだが、俗信仰でいう御利益とか、靈驗とか、××教で病が治つたとか、○○神が災厄を除いたとかの類には、この詮なき一本の薬、いや灰色のヴェールに類したものがないとは言えない。一本の薬がまさしく溺れるものを救つたかどうか。外國にもこんな

話がある。

フランスのマルセーユの港近い丘の上にある聖堂は、いはゞ西洋の金比羅さまとでもいふのであろう。堂内の壁一面に多くの船の繪や寫眞やらの額がかゝげてあるという。それは海難のときにその聖堂のマリアに祈つて助かつた人が御禮にあげたのだという。或るとき、こゝに參詣した英國の有名な哲學者フランシス・ベーコンに案内者が、この澤山な船の額を指して、いかにこゝのマリア様が靈驗いやちこであるか、その證據には、海難にマリア様を祈つて助かつた人のあげた額がこのとおり澤山ありますと説明した。するとベーコンは冷やかに笑つて、マリア様に祈つたが助からなかつた人の上げた額はどこに掛つてゐるのか、と言つたそうである。成程、マリア様に祈つて助かつたことだけを取つただけではいけないのであつて祈つたが助からなかつた數の統計をも考へて比較してみなければならぬ。さうして假に助かつた方の比率が多かつたにしても、それですぐ御利益とゆう結論を下す譯には行かない。祈つたことゝ助かつたことゝの間にたしかに原因結果の關係があるか、どうかを検討せねばならない。ベーコンは信仰を否定したのではない。彼の冷笑は俗信仰が、えてして全く片手落の統計による自己主張をしてゐることに冷笑の一矢を放つたのである。

いろいろの場合に、多くの苦惱する人たちを誘ひこんで行く迷路が少なくはないが、「信仰をもつ」とはこんな道によるものではない筈である。

俗信仰のよく言う如く、神佛が何かの刑罰として私たちに、病苦をあたえたり、人生の曲折轉變を與えるのではない。阿彌陀佛は人間のもつ弱さ、罪の深さ、そうした人間を救はんがためにこそ救ひ

の誓願をたてられた。「苦しいときの神頼み」ということは古くから言われているが、よく世間にある新しい宗教、俗信仰の方法によつてたとえば病苦を治療しようとすることは、現代の科學的知識が承認し得るところでないとともに、そうしたことは本當の意味での信仰者の態度でもない。それは卑怯にも病苦を回避しようとするものであつて、先に言つた人生の眞實の奥深いところを直視することを避けて、灰色の眼鏡をかけるものである。病に處するためには正しく醫學の教える所に従ふがよい。何らかの病に不幸かゝることも、私たちが人間である限り絶対に避けることが出来るというものではない。私たちは正しく人間の本質にある弱さ、それは病氣の問題に限らない、ぎりぎりのところ人間の有限・無力を、はつきりと見究めることが大切である。そこに有限に對する無限が、無力に對する有力が感受されて来る。

私たちが生きてゆくことには私たちの人生には、避けることの出来ないもの、私たちの理解を超えたもの、私たちの意志ではどうにもならぬものが現われて来る。運命といつてもよい。私たちはそれを事實として受け入れる外には道はないのである。といつて、受け入れると言うことは、世間に言う、諦めるとか、甘んじる、といった消極的な、仕方がないといった底のことを言ふのではない。

法然上人は

「念佛申す様は、むまれつきのまゝにて申すなり。さきの世の業によりて今生の身をうけたる事なれば、この世にてはえなをしあらためぬ事なり。たとへば女人の男子にならばやとおもへども、今生のうちには男子とならざるが如し。賢者は賢者にて申し、愚者は愚者にて申し、慈悲者は慈悲者にて申し、慳貪者は慳貪ながら申す。一

切の人みなかくの如し。されば阿彌陀佛は十方衆生とてひろく願をばおこしてまします」(和語燈錄)

と説かれている。「生れつきのまゝ」——この言葉に、私は深くうたれる。人間の歩みが様々の曲折をもち轉變にあうことの、避けがたいこと、その事實、それを「運命」と呼ぶなら、またそれは「生れつき」と呼んでもよい。「この世にてえ直し改められぬこと」である。敢て人生の轉變、病老死などをいわずとも私たちが遺傳として負わされている體力、容貌、血縁や、社會關係から與えられている身分や人種別などにした處で、何ともし難いものである。「女人の男子にならばや」と思ふことの出来ないのと同じである。つきつめれば私たちが生れて來たそのことさえ、それが幸運とか不運とか見るのは別として、どうにもならぬことである。

こうした人生ののつびきならぬところにつきつめて面し、積極的に私たちは之を受け入れるときに、それに堪える覺悟が湧き上る。私たちは勇敢にそれを受け入れよう。人生眞實の底にあるものを避けることなく、之を肯定して行こう。「生れつきのまゝにて」とは、こうした人生への積極的な受け入れ態度を言うのである。そのとき明らかに私たちは私たちの知識を、意志を超えた不可知なる無限者を感受することが出来る。人間の限界を自覺するものこそ、眞に理解の外なる無限者を感受することが出来る、佛の前に跪き、「たゞ念佛」することが出来る。生れつきのまゝの念佛は、惱むものゝ惱みの中に於て、悲しむものの悲しみの中に於て、眞實の人生にふれ、人間の眞實をつかんでひるまずに進まうとする信仰者のものである。苦惱する魂こそ人間の眞實を知り、正しく宗教に生きる門を通る一步を行くものである。



自己を信ずる

中野 尅子

「吾が家」「吾が家」と思つていたら、コノ家は、これ神様、如來様の住んでいられる神聖な家でした。「神様、如來様の家」の中へ、私達の方が入れて頂いて居るのでした。

どんな小さい家、古い家、よごれた家でも、實は神様佛様の住んでいられる尊い神聖な宮殿でした。穢れのない清浄な宮居であることにも氣がつかず、狭いとか、暗いとか、臭いとか云うてコゴトを云つて居りました。神様や佛様はソレを知らぬ顔して聞き流し、自由に使はせ、不平云はせて黙つていられた、私達はソノ神様の寛大なお心持や、やさしいお心持も知らずに、いゝ氣になつて「吾が物」顔に亂棒に使い、吾が物顔に私有して來た思へば知らぬ事とは云い乍ら畏多い事です。

いや、「家」ばかりではない、着物一枚、下駄一足、楊子一本、塵紙一枚に至るまで、如來様の御物を無斷で拜借し、有難いとも、勿體ないとも思わずに平氣で過ごして來ました。知らぬ者ほど押しの強い、厚顔なものはありません。そんな衣食住に關するお道具ばかりでなしに、此の田地も、此の湧く水も、豚の子も、鶏一羽までも一切が佛の物です。自分自身までも、いつの間にやら産れ、いつの間にやら育てられ、いつの間にやら、だん

く如來様、神様の御用に勤まる人間にせられていたのです。そしてコレがこれから何年生きるやら、何遍病氣をやるやらわからぬが、兎に角、終始一貫して如來の御用を奉仕す

信 仰

町田 トシコ

肉體や物質が「人間」を支配し
懷疑、厭世、虛無、偽善、利己、
精神の本尊は今や等々の煙の渦の中に立つ
この、こんとんの煙の源のもの凄さ、
肉體と物質が「人間」を占領し
闘争、絶望、頹廢、怨恨、叛逆、挫折
精神の祭壇は今や等々の猛火に圍まれてゐる
この、こんとんの焰の色のもの凄さ、
没落か、脱出か

だが、どんなに無慘にさいなまれても
「眞理」は常に地獄の底を貫いてゐる、
おお、いとしき自己よ

おまへは、この不思議なる
「眞理」への思慕の魅力に

火焰の中で精神の殿堂を喜んで死守する

—無量壽經に曰く、端身正行、阿耨多羅三藐三菩提—

べき光榮ある身であることをだん／＼覺えるようになりました。

そしてコレは、よく考へれば自分の中に、「如來様」が宿つていられて、「内から」だんだん心附くようにして來られたと云う事を、此頃ハッキリ感ずるようになりました。此の穢い、此の淺間しい、此の愧つかしい「自分」の中に、如來神様が住んでいらして、内から石炭でも焚くように信仰の火を燃やしていられたのです。電燈が中から光り、花が内から咲いて來るように、眞實の人間性——神性——靈性が、内より發達し、發輝せられて、此の「神の自覺」を與へて下さるようになったのです。

人間には、一面賤しい、醜い、愚かしい姿があるが、反面コノ強い、尊い、美しい姿があります。醜さのみを常の姿として、尊き眞の姿を忘れては、神を穢すものであります。

静岡の〇〇銀行の近藤さんは、いつも明るく元氣な人だが、もう廿何年も勤續してられる。自分の下に五十何人使つて居られるが、仕事の關係で他の者に注意したり、叱つたりすることもあるが、もう翌日になれば忘れて少しも其の人を咎め立てせない。昨日の其人と、今日の其の人とは別人間だ、もう遙かに立派に良くなつていると信じて、信賴して用いる。だから皆の人が驚くばかり良くなり、向上して、よくなつて行つていゝるそうです。同時に對しても「自分を信ずる」。私は昨日の自分とは變つていゝる、よくなつていゝる。進歩してゐると信じて一層努力して行くから、いつも心持よく、楽しく、勉強が出來て、成績も上がると云つていられます。

暗い一面、悪い一面を知るといふことも反省だが、明るい一面、正しい一面を見出すと云うことも更らに大きい反省です。

いつも刑事眼で見るだけではないかぬ。

お十夜とは？

——大人の社會學——

人聲の小寺にあまる十夜かな 召波

ふだんは訪う人とても少い田舎の小寺も、お十夜には近在の善男善女で賑はつてゐる。

十夜念佛のお勤めが始まるまでを、日頃野良の道で顔を合はせる連中も多いとみえて、今年の豊作の話をはずませていると見ると、あつちの方では、年寄りの女連が和讃をそろそろ始めるようだ。——淨土宗のお寺の特色ある年中行事の一つ「お十夜」は今も廣く行われているのに、お彼岸やお盆ほどには、その意味が知られていないのは、お十夜について分り易く書いたものゝないせいもある。こんど淨土トラクトの一つとして「お十夜の話」が上梓される。大正大學で史學を講じてゐる藤田寛雅氏が、讀み易く、しかも正しい史實に基いて書き下ろされたものだけに、大人の社會科讀物に、寺院の傳道頒布におすすめする。

◇上梓は九月下旬、今から豫約願ひます。

◇一部頒價四圓豫定(送料六圓)

騒音の中の尺八

喜 熨 斗 謹 也

それをフト耳にした時、私は思わず立止つて、私の耳を疑つたほどであつた。ガーッと、いうすさまじい音を立て、省線が往き來する高架線のガードを潜つて、その高架線に沿つた堀に架けられた橋の上を歩いてゆく私の耳にはそんなと絶え入るような哀れっぽい尺八の音が聞えて來たのである。

私は空耳ではないかと思つた。こんな場所で尺八の音が聞えて來るなぞ全く思いがけないことだつたし、風景とその音色との對照があまりにも奇妙なものだつたから……。

私は立止つたまゝ、聞えて來るのが尺八であるかないかを確かめようと耳を澄した。ガーッ、ッ、ッ、又省線が行き過ぎた。その間、私はそのすさまじい轟音を聞くばかりであつた。

橋は戦災を受けたまゝで車馬の通行を禁止してあつたが、堀に沿つたあまり美しくない

ビルや倉庫の立並ぶ路を、車輪を軋ませ警笛を鳴らして自家用車やトラックが疾走して行つた。そうして自轉車のベル。——そこから遠くない銀座通りの方角からは、その他種々雑多の、一口に云つて都會の騒音ともいふべきものが聞えていた。

その騒々しい音や響の低まる間を縫いながら、騒音というものによつて象徵される都會全體に對して弱々しく反抗するかのよう、ヒョロロロ／＼と聞えて來る音色は、やはり間違ひなく尺八であつた。長く／＼息を吸うような尺八のトレモロが、眞晝の都會の埃臭い空氣の中を、騒音に消され／＼しながら、哀調を帯びて流れて來るのである。

何所で吹いているのだらう……私は尺八の主のありかを尋ねてあたりを見廻した。橋の兩側に崩れ落ちた欄干の鐵筋が、よき／＼と突ん出て醜く、赤錆びていた。

水はドロリと青黒く澱んで動かぬまゝに表面に空を映して光っている。灰色の煉瓦が斑でところ／＼剥げ落ちてゐる高架線、そこに立つ鐵の電柱と、空を截つて走る幾本かの電線——その向う側には大小美醜、どれもが等しく四角張つたビルディングが並び立つていた。そのうちの一つのビルは、私が二十分程前人々が目まぐるしく右往左往して立働くその六階の事務室で用を足して來たところだつた。

やがて私の目は、高架線から向う側の道路に出るガードの入口の端に坐つて尺八を吹いている浮浪者の姿を發見した。私がそこを通つた時は、彼は吹くのを止めていたので氣が付かなかつたのであらう……。

それと知れると、私は尺八の音を後に聞きながら歩き出した。歩きながら、私は後から聞えて來る尺八の音色に自然と耳を傾けた。

ガーッ、ッ、ッ、又後の方で高架線を省線が走り過ぎた。その間だけ尺八の音は途絶え、騒音の波が弱まるにつれて尺八が浮び上り、又消され、又浮び上つた。騒音と尺八の哀調との交錯——私は風の音ばかりしかせぬ山中でよりみなお静かな／＼ものを聞いたような心地がした。だがその音色を愉しむという

氣持ではなかつた。あわたしい都會での仕事
の行きずりにふと聞えて來た尺八の音色に
心を慰めながら、私は反面ではその感傷めい
た氣持に強く反撥しているのであつた。

やがて尺八の音色は全く私の耳許を去つて
行つたが、往來の繁しい舗道を歩き乍ら、幼
かつた頃のことを思い出してゐた。

十一二の頃、死んだ祖母に連れられて夏の
休みに那須温泉へ行つたことがある。私の泊
つた宿屋の庭に、毎晩虚無僧がやつて來て尺
八を吹いた。すると祖母は、

「六段だよ。追分だよ。」

と、その曲の名を一ツ／＼教えて呉れた。

子供ながらに山の中の温泉宿で聞く尺八にも
の寂しい、やり切れない氣分を味わつた記憶
がある。

東京の真中で、騒音の中で聞いた尺八の音
に、私は子供の頃をなつかしみながらも、又
その哀れな音色にやり切れないいらだゝしさを
感じていた。その氣持は、自分の缺點を人
に指摘されてモジ／＼する時のようなバツの
悪さによく似ていた。

都會の騒音と尺八の哀調——私は押し潰し
てゆくものと押し潰されてゆくものゝ對照を
はつきりと聞いたような氣がした。押し潰さ

れてゆくのは尺八を路傍に獨り吹いてゐるこ
の浮浪者の運命だけのことではない。

いま日本人の誰もが、押し潰してゆくものゝ
と押し潰されてゆくものゝ眞つ只中にゐるの
ではあるまいか……そして人は屢々、押し潰
されねばならないものを反つて保存して置こ
うとする誤りを犯すことによつて、自分では
氣付かぬうちに押し潰されてゆくのである。

國土と同胞と世界への愛情——私は、眞實
自らを愛するものは、先ず自分を改めてゆく
意欲と勇氣をもつ者だと思ふ。その意欲と勇
氣とは、浮浪者の吹き鳴らす尺八の哀調の中
からは生れて來ない。

若しかするとあの浮浪者は、何もかも諦め
きつて尺八を吹いていたのかも知れない。そ
れならば、彼は尺八を抱いて都會の中心から
離れるべきである。省線の騒音にさまたげら
れない所でこそ、彼の尺八はその細々と哀れ
な音色の効果をより大きくするであらうから
……。

或は又、彼は故意にあのような場所で尺八
を吹くことによつて、都會に向つて呪詛を投
げかけてゐるのであらうか……しかし、都會
の騒音は常に彼の尺八よりも強力である。彼
はそれを知らないのか、或は強いて知らうと

しないある種の人間に歸するのであらうか……

後日再び私がその場所を通つた時、その時
も同じ浮浪者がいて尺八を吹いていた。浮浪
者はもうかなりの老人で、運命の哀愁を一本
の尺八にこめて吹き鳴らすかのようなであつ
た。

ガーッ、ゝゝゝ、轟音が彼の哀愁を打消す。
省線の通り過ぎる轟音なぞ大嫌いだ、尺八
の哀調がそれに打消されている當然さが、此
の場合寧ろ小氣味のよいほどであつた。尺八
が悪いのではない。浮浪者が悪いのでもな
い。

當然のことが當然の現象としてあるのであ
る。たゞ奇異なのは、浮浪者が都會の騒音の
眞つ只中を選んで、古い／＼日本の哀調を帯
びた音色を發する樂器を吹き鳴らしているこ
とである。これとよく似たこと柄に私は度々
出會うのであるが、その度に私の感じるのは
尺八を聞いた時と同じやり切れなさである。
だがその結果、やり切れないという氣持が尺
八の音色の哀調へ私を誘わずに、そのような
時、私の心の中の高架線を、ガーッというす
さまじい音を立てゝ省線が通り過ぎる。

強^{こわ} 清^し 水^{みづ}

竹 中 信 常

歴史の夢多い會津若松から東へ、白虎隊の哀詩をひめた飯盛山を右にみて、はるか盤台山の影を浮べる猪苗代の湖南、福良へ通ずる往還には、途中、上り三里の峠がある。

當時七十八歳の老父と、妻子とを、漸やく危険になつてきた若松市から、更に福良へ至る中間の、矢張り湖の南畔に位いする湊村に移したわたしは、終戦前後のこの一二ヶ月の間に數回、この往還を自轉車で、そしてまた時にはバスでかよつたものだつた。

若松市を東に出はつれるとすぐにゆるい傾斜となり、やがてはそれがうねうねと曲りくねつて山腹をたどる山道になる。その山道のをぼりつめたところは、十數戸の部落になつており、昔からの街道すじのせいでもあろう茶店や物賣る家が二三、軒をならべている。

むろん現在ではバスの停留所にはなつてゐるがここから北會津へぬける人のほかは、バスを降りる人もない淋しい部落である。

現今でもなお時折りみかけが、戦時中には軍用以外は、すべてそうであつたあの代燃車——尻に大きな釜をつけ、妙なところに煙突をつけて、のろのろと重たげに走る木炭バス、それも一日一回、若松驛前を發つて福良に行き、翌朝でなければ戻つてこないとあれば、その混みかたはひととおりではない。車内は暑氣とひといきれと、それに加えての尻の釜の熱とで、全くの焦熱地獄、三里の道が百里にも感ずるほどである。午後三時、驛前を出て、峠の部落までのぼつて來れば既に五時、さすがに長い夏のひざしもめつきりと西にのび、ひぐらしの聲が一しお高まる。

ひとびとの心は、バスが部落に入ると、やれやれとゆるんで、車内は心なしかザワつく部落には、丁度バスのとまる茶店の傍らに、この近邊で「強清水」と呼ばれる清水がある。車内の熱氣に疲れたひとびとの心は、期せずしてこの清水に注がれるのである。バスの止まるのを待ちかねて、カン詰めの鯛にも似て體が平らたくなるほどにつめこまれていた人々は、先を爭うようにして車外に出て、この清水の周りにむれ集まる。

清水は、茶店の傍の、崖際にさしかけられた四阿に、二尺ぐらいの、きめの荒い石で疊んだ一間に二間ほどの矩形の水槽の、山側のところから涓々と湧き出でている。苔むした底石の一つ一つの凸凹が手にとるように透いてみえるほど、その水はすきとおつて靜かである。

心ない人々は、そなえつけてある直徑四寸ほどの竹柄杓を奪い合うようにとつて、ザブりとくんでこれをのむ。だが、この柄杓一杯の水を一度に一息でのみほす人は一人もいない。いや、どれほど乾いている人でも、半分とつけてのむものはない。清水が餘りにも冷たいからである。二時間あまりの炎暑の旅の後の咽喉には、この清水の冷たさは氷以上

に感じられる。人々は入れかわり、立ちかわり清水のまわりに寄つてその冷透の味を満喫してゆく。わたしも人々に立ちまじつて、この清水に咽喉をうるおす一人であつた。水の味は、此地方一體が火山岩地帯であるせいか硬質の、どちらかといえは滋味を持つた、何となく咽喉にからまるような風味を持つてゐるようである。それに、非常に冷たく、清水を湧かす岩肌には、ちつとりと汗が浮いてゐる程であり、そのつめたさが加わつて、この清水の味は、他の生水とはちがつたものを持つてゐるように思えた。

よくみると、水溜は二つに仕切られており清水が湧いて、かすかに波うつてゐる方の區劃は小さく浅い。その仕切りを溢れ越えた他の一方の區劃は大きくて深い。澄んでゐるので浅くみえるが、杓の柄の三尺程あるのをぐつと差し入れても手應えがない。人々が水を掬み、手拭をしぼり、口をすすぐのはこの大きい方の區劃である。誰一人として、清水の湧いてゐる、小さい區劃に手を入れるものがない。冷たさも恐らくは、湧いたばかりの水の方が冷たいであろう。水も靜かに澄んでゐる。だが一人もこちらへは近づかぬ。始めの一二度は氣づかなかつたが、三度四度と、通

る度に、いつしかこのような土地の人々の仕草に氣がついたのである。そういえば、水槽を二つに仕切ることに意味があるにちがいない。旅の道すじ、而もバスのとまる僅かの間のことなので、土地の人にそのいわれをきくいとまもなく、心にもまたこれをたづねる餘裕もないままに、いつかきこういつかきこうと思いつつ、とうとう、そのまま家族をつれて山を引はらつて以來、未だにその機會を得ぬのだが、あれほどにかつえ、欲した清水だから、よほどのいわれがなくなつていつかりと手をさしのべようものと思うと、何故これを確かめさぐらなかつたのか、自分の怠惰が愚かしく感ぜられもするのである。

バスの運轉手は心得たもので、人々が車外に出てひと息入れている間、要領よく姿を消して、ものの十五六分も経たねば現れて來ない。茶店の奥か、知り人の家にでも行つて、澁茶でもよばれてゐるのであらう。車掌も時には運轉手と行を共にすることがある。そうすると、道ばたに止められたバスの中には、降りたり乗つたりするのがおつくうな老婆かあたりにもものおじて動きたくないといった風情の旅の若い女の人が、ほんの二三人残るだけになる。パンツ一つの、眞黒に日焼けし

た部落の子が二三人、はだしのままでやつて來て、ステツプに足をかけたり、時には運轉台に入り込んで、ラツパを押して、ブーというその音におどろき笑いながら、ワーと逃げ散ることもよくあつた。四阿には、四圍に浅い腰かけがめぐらしてあり、人々はそこに腰をおろして一服する。

ひとときののち、またしてもバスは、腹一杯に人間をいれて木炭の煙を吐き乍ら、峰ぞいに南へと走り去るのである。

老人も家内も、もう會津の山暮しなんかは眞ッ平だと、東京の燒跡のバラツクの中で口を揃えていつてゐるのだが、わたしには、會津の山の夏の味合いを捨て去りがたく感じられる。ことに強清水の、あの音もなく、涓々と流れ流る清水の、肺腑にまでしみとおる冷たさは、あれ以來、わたしの毎夏夢みる幻想の主題となつてしまつてゐる。それとともに、強清水がわたしにもたらすもう一つのものは、百喻經にひかれてゐる、或る老婆の愚かしいわざについての寓話である。

昔、中インドの或る國に、アマロクと土地の人々の呼んでゐる大樹が、大野の眞中に立つていた。この樹に結ぶ木の實の味は、世界に比類なく甘美であり、その香りは遠く海を

へだてたセイロン島にまでふくいくと風に運ばれてゆくほどであるといわれていた。或る時、一人の老婆が腰に酥といううまい飲物を入れた容れものをさげ、重い荷を背負つて、焼けるような暑さの中を、この樹のところまで旅して来たが、暑さと疲れとに耐えかねて涼し氣なその樹蔭に腰をおろして、しばらくは肌をひろげて風を入れた。ふと仰ぎみるとうまさうな木の實が枝もたわわに成りさがつている。老婆にとつては正に天恵の贈物、手をのぼしてその一つをとつて口に入れた。うまい。滅法うまい。舌のとろけるような甘さかすかな酸味。からだ全體にしみとおるような爽々しさ。かんでいると口一杯にあふれて来る汁氣。まつたく地上のものとは思えぬその味。その上に、セイロン島までも届くという香りが、老婆の汗くさい體をすつかりと洗い清めてくれる。思はず、次の果に手がのびる。三つ、四つ、五つ。老婆は夢中になつて長い生涯の未だ曾つて覺えたことのない此味を、むさぼり味合うのであつた。人間の腹は限度がある。やがて老婆は満ち足りたか、のばす手を止めて、満腹した自分の腹をなせて微風の中に目を細めた。やれやれおいしかつたわい、と。ところが人間の欲には限度がな

い。木の實の甘さは水を求めた。老婆は、飲む水を探がして、坐つてゐるまわりをみまわしてみた。水がほしい。さう思うと、無性にのががかわいて来た。泉はないだろうか。老婆の念頭には、も早や今たべた木の實はなく目はひたすらに泉を求める。これまた天恵の贈物か、樹陰から程遠からぬ叢に、一つの泉があつた。涓々と湧き出づる泉は、草の間を這つて清冽な流れをなしている。掬つてみれば、手の凍るような水には微塵のよごれもない。一口のんでみる。うまい。滅法うまい。その冷やかさ。そのうるおい。何ともいえぬ味。こんなおいしい水はのんだことがない。何というおいしい水だろう。老婆の口中には今たべたアマロクの甘味と香りとがあつて、それがこの清水に溶けて、一種いうにいわれぬ風味となつたのである。木の實の濃さが水に薄められて、先とは異つた淡々たる味覺を呼んだのである。老婆はこれには氣がつかぬ水がうまい。水そのものにおいしい味があるのだと思つた。こんなおいしい水を自分だけで飲むのは勿體ない。そうだ、村に持つて歸つて皆なにも飲ませてやろう。老婆は腰の容れものの中にある酥をあけてしまい、この水をつめて、回復した體に、元氣よく荷物を負

つて歸途についた。

老婆の歸りを迎えた村人達が、老婆が腰につけて持つて歸つた、長い間を日に曝らされてなまぬるくなつた、何の變哲もないたゞの水を飲まされて、怪訝な顔をし、あきれ、おどろき、些細をきいて、はてには笑い出したことはいうまでもないことである。

釋尊はここで、老婆の愚さをいましめておいでになる。人は本來佛性という甘い酥を持つてゐるにかかわらず、目先の利欲——アマロクの甘い味にまよわされて、これをすてたゞの水を掬む。このように人は日常の生活に埋れ去り、あらぬものをあえぎ求めて、眞の幸福を遠ざけてしまう。

強清水のあの水の味、たしかにおいしい水ではあるが、あれが町近くか、或はあの前に長く苦しい旅の道がなければ、決してあのように味合われはすまい。アマロクの甘い味を味合つた後だつたら、わたしもまた老婆の愚をくりかえしたかも知れぬ。いや、水を離れてみるならば、わたし自身、日常の明け暮れの中で、甘言に、甘味に、阿諛に、へつらいに、そしてさそいに惹かれて、倦きもせず、日夜老婆の愚をくりかえしているものなのである。

五平と青ノ市

吉田宣成

けだるい初秋の斜陽が、山門の扉に白くさしかゝつてゐる。白いムク犬をつれて、その石段を登つてゆく年老いた^{せむし}僂僂男がある。法師蟬のおぼつかぬ鳴きぶりが、老不具者の足もとを追つてゆく。けはしく歪んだ顔に、煤けた皮肉笑ひが微かにのぞかれるのも、彼の踏んで来た暗い生涯を物語つてゐるのだらう。

この畸形の老人が、その寺の裏山にある秋葉大権現の堂守五平である。生れが何處であるかは、五平自身にもハッキリしてゐない。唯わずかに、東北の産だらうとゆふことが、その訛によつて解るにすぎない。生れ落ちると、いたゞしいコブを背負はされたまゝ、旅廻りの見世物に賣られ、蛇娘、ロクロ首、小人が鞭一つで踊らされる地獄のやうな世界に彼の生立ちが始つて行つた。色褪せた緞帳を引き、はかない玉乗りにおどけ、客寄せの柏子木を濫板にバタつかせる仕ぐさに、彼の生涯の大半が蝕まれて行つた。いはゞ五平の生涯とゆふのは、おどけた作り笑ひの裏に、トゲトゲしい猜疑の心がよどんでゐるやうなものだつた。

妙な因縁でその権現堂の堂守におさまつたものゝ、當り前の人間づき合ひの出来る筈もなく、他人を見る五平の眼には、いつも猜疑と侮蔑の翳が覗かれてゐた。従つて彼には、痼氣とゆふ持病があつ

たが、發作が起きても頑なに他人の同情や世話を斥けて、油汗を流して二三日堂裏の暗い部屋で呻きつゞけてゐた。そんな孤獨な日常を、五平は彼なりに送つてゐた。

その頃、塔中の蓮華院の天井裏に、中年者の按摩が住み込んでゐた。通稱を青ノ市といはれる位、この男は青ぶくれた顔つきをしてゐた。うつろな白眼をむいてムク犬のダニをまさぐつてゐる青ノ市の坊主頭が、門前の日溜りでちよく／＼みうけられた。江州の産と稱し、唯一の娛しみは猪口に三四杯の濁酒であつた。青ノ市は夕暮になると、うす暗い天井裏の蜘蛛の巢の下で、萬年床にうずくまり縁の欠けた猪口を意地きたなくなめてゐた。本職の上下十六文も一向にはかゝ／＼しくなく、つねに懷中は輕つたが、別にとり立てゝあぐせくもせず、人のよい面つきでムク犬と目をすくすくすることが多かつた。

この貧乏按摩の青ノ市が、蓮華院の天井裏に巢喰ふやうになつて間もなくのこと、ムク犬のことから堂守の五平と知り合ふやうになつた。眼の見えぬ青ノ市に、五平も何やら生來の頑な心もほころび、それに加へて不具者同志の格別の親しみも手傳てか、ちよくちよく氣のおけぬ青ノ市の萬年床で、彼等なりのつき合ひを始めるやうになつた。割勘であがつた一合ほどの濁酒をなめ／＼、

「時に青さん、一體おれは痼氣でえ持病があるんだが、按摩は効くかえ？」

五平は心なしか、はゞかるやうな口吻であつた。手のひらにこぼれた濁酒の滴をちよろいなめた青ノ市は、やゝ威厳をこめて、

「効くが効かねえか、まあ一べん試してごらん。この青ノ市の治療は、ちと別だて」

五平は珍らしく素直ほに深くうなづいた。その夜五平は至極上氣嫌で、月のよい初秋の山道をムク犬に送られて歸つて行つた。

その後五平と青ノ市の間にこんな約束が取り交はされた。若し痼氣の發作がおきたら、堂内の太鼓を三點打すること、治療して即坐に治れば、五平において濁酒五勺をおごること、ゆふのであつた。そして山道の案内はムク犬の役目と決められた。以來例の發作がおこると、夜中でもかまはずドンドコ／＼太鼓が打ちならされた。青ノ市は濁酒々々とおごりながら萬年床を這ひ出して、臺所の土間の隅にうずくまつてゐるムク犬の繩をほどきに行くのだつた。やがて權現堂の裏部屋で、片だすきを掛けた青ノ市が、青ふくれた顔を斜にしたり縦にしたりして、呻く五平の腰のあたりをもみほぐし始めてゐた。ムク犬が戸外で哀しさうな欠伸をした。そんなことのあつた翌朝には、萬年床に腹這ひになつた青ノ市が、まず朝めし前の一献を傾けてゐた。

しかし不思議と、青ノ市の按摩は五平の持病には効能があつた。

五平は濁酒の五勺ぐらいには代えられなかつた。

「どうだい五平さん、ちつたあ見直したかね」

「全く風體に似はせねえ腕前だ」

「ちよく／＼發すことだ」

「冗談ゆふな、こつちやあ死の苦しみだ。その上飲まれてよ、ふんだりけられたりさ」

やがて二人は追々にこんな冗談を交す間柄になつて行つた。五平も青ノ市にだけは、人間並な心持で交ることができ、始めて人情の温かさを味ふことに懷しみを覺えるやうになつた。濁酒めあての青ノ市も、根が氣の良い男だけに、次第に親身になつて五平の世話を

し、たまに治療代が入ると、壺に濁酒を充して堂を訪ねて行つたりした。酔ふほどにさるほどに、五平が旅廻り時代の經驗談を、やゝ誇張して話し出すと、青ノ市は黙つてよい聴き手になつてやつたりしてゐた。

こうゆふ遠慮のないつき合ひが始つて一ヶ年の月日が流れて行つた。この海に近い村は、九月に入ると決つて大きな時化に見舞はれることがあつた。村人は特に、東南風のジトジトした生あたゝかい風向きに變ることを怖れてゐた。

その日は朝方から空模様に変つた。なだらぬ氣配がうかゞはれた。朝焼けがして、海上は小波があわただしくぶつかり合つてゐた。漁師達は憂へを、陽やけた額にこぼらせ、砂丘に腕ぐみして特有の勘を働かせてゐた。が今まで海上に向つて吹いてゐた風がふつと止み、一時無風状態になつたのは、ちやうど天井裏の青ノ市が、いぎたない午睡からさめて間もなくのことだつた。

「滅法むし／＼するて、こんな時にやあ……」

いゝながら青ノ市は傍の壺をとつて、耳もとで振つてみた。残り少いらしく壺はコボコボ鳴つた。その時、外で、

「東南風が来るぞう！」

けた／＼ましい叫び聲がきこへて來た。青ノ市は口もとへもつてゐた壺をとめて、階下の方へ耳をそば立てた。臺所の方でムク犬が遠吠えのやうな嫌な鳴き方をし始めた。

やがて身體に吸ひつくやうな濕風が氣味悪く吹き始め、よどみきつた雲が、五平の住む權現堂の上を西北に向つて吹き荒れて行つた。刻々に風はつのもり、大粒の雨が渦をえがくやうに降りそゞいで來

た。暮れるに従つて、つんざくやうな雷鳴が加はり、家中がみしめし鳴りつゞけた。床下から吹き上げる南風が、折々庫裡の古疊みを浮き上らせた。

青ノ市は梁から落ちて来る煤や埃を浴びながらも、頭上で裂ける雷が一向に遠のく様子もみられぬので、ゆら／＼揺れる天井裏で觀念した體で固くうずくまつてゐた。階下からは相變らずムク犬の奇妙な喉音がきこえて來た。

その時、青ノ市は、暴風雨と雷鳴のつゞく中に、かすかに太鼓の音を聴いた。盲人特有の勘が、轟音の中から途切れがちの三點打をとらえたのである。萬年床の襟から怖る／＼青首をもたげ、白眼をむいてそれを確かめようとした。正に五平の打つ太鼓の音色である。

亂れがちな三點打である。青ノ市の腦裡には、暴風雨の山頂に油汗をたらして呻く五平の地獄繪が想像されて来る。肩で息をつきながら、傍の太鼓をしがみつくやうにして叩いてゐる五平の形相は、目の青ノ市にも迫つて来る。耳朶をうつ太鼓の音は、いよ／＼亂れて来るやうだ。青ノ市はやにわに其處に立ち上り、着物の裾をはしより、手拭で頬かむりをする、雷鳴も耳に入らぬかの體で、煤けた階段を下りて行つた。臺所の土間へ素足で降りると、ムク犬のつないである隅の方へにじり寄り、

「ムクや、頼むぜ」

繩をほどくのも、もどかし氣だつたが、やがて青ノ市は、つんざく雷鳴と瀑布のやうな豪雨の中へ、ムク犬と共に吞まれて行つた。

そして、權現堂の裏手にそびえてゐた老樹、龍燈の松に大音響と共に落雷のあつたのは、それから數時間後のことだつた。老松は眞二つに裂け、權現堂は火をふき、また／＼くまに堂宇は焼け落ちて終つた。風雨の去つた翌朝、焼跡に見出したものは、二人の不具者の折重なつた焼死體であつた。そして手洗ひの下には一匹のムク犬が半身こげたゞれて息たえてゐた。

老人訓

相馬 愛藏

(八十翁)

近來、青年と老人の家出多しと聞き之を撰む。

一、老人は既にこの世の務を果せし身なれば若き當事者の邪魔をせぬ様心掛く可し。

二、老後の貯えを持たざる者は若き人々の世話を受くることなれば、この好意に感謝して夢にも不足の心などありてはなりません。

三、老人の身にて出来る事は何なりとして忙しき人々の手助けを心掛く可し、庭を掃くとか雑巾をさすとか、孫共に昔話などして楽しましむるがごとき、

四、家族は勿論、近隣親戚の人々に對し親切の心を以てつき合い、決して不快を與えざるよう心得べし。

五、良き老人は萬人に尊敬さるるが常なれど、應々にして世人に嫌われ、己が子供、孫等に迄邪魔がらるるもの少からず、之はまわりの人々の惡きにあらす、老人自身の不心得の結果なれば大いに反省自肅す可し。

六、老人は若き人々の話の席に加はることは遠慮して讀書か、または寺・教會等に赴き、有難き教えを聞き、長壽を感謝しつつ御迎への来る日を靜かに待つ可し。

初秋に

生きる美



早見 君子

前號のお約束では御婦人のためには、夏の服装、半襟の持つ使命、香水について、男子方のためには、浴衣、香水と男性、などに加へて近頃流行のアロハシャツの感想も書く豫定でしたが、すでに立秋も近く晩夏初秋となる今頃少々古新聞の感がありますので、それは暫くお預りと致しまして此號では處女の方の美容について、部分的に書く事にしました。

處女と化粧

純潔を生命とする清らかな乙女のお化粧法は、どんなやうにしたらいいか、非常にむづかしいものではないか、といふ問ひもよくうけるのですが、少しもむづかしいものではありません、亦創作的な考へかたも必要ではありません、要は只、無理をしない事、色彩を淡くする事、作り過ぎない事の以上につきます、つまり眼ぐまを入れたり、鼻を立てたり頬紅が強過ぎたり、あくどい色の口紅を使つたり、強烈な爪紅を光

らせたり、技巧に過ぎた髪型の型であつたりしないやうに心がければいいのです。最近のお化粧のありかたについては前號に述べましたから御参照下さい。

處女の服装

近頃物はたいへん出て居りますが値段が高いに粗悪な品で、此の世代に娘さかりを過ぎさうとするお嬢さんがたは本當に氣の毒に思ひますが、何も新らしい物ばかりねはずとも、お父さんやお母さん、或は祖父母方の物からでも考へかた用ひかたに依つては、却て獨創的な自由さを持つ面白い物が身につけられるのではないでせうか。

戦前の有りあまる時代には獨特な工風も眼に立たず、現今のやうに無から有に産もうとする創意も工風もなく、デザイナーまかせの流行型にはめられた個性の無いものが多かつたのでしたが、今こそはどんな物でも着物になり洋服になつて、くわだてな

いすばらしい成功が一人一人別々に見られる面白い時で、むしろ有りあまる時代をこそそのろふべきだとさへ思ふのです。

和服にせよ洋装にせよ、勿論あれこれと注文をつけません、清らにありたい美しく床しくありたいといふ本能からくる愛すべき處女の努力と智的な創作をこそ望み深く、しかも希ふ心をもつて拜見してゐたいと思ひます。只忘れてならない事は、みだりに官能的なデザインであつてはなりません、あくまでも清潔と清楚から出發したシンプルな型をこそ望ましいものです。

清純な美を

乙女の命は心身共に清純さがもりあがるやうでなければなりません。不潔な感じ、垢つきよごれた感じは大の禁物です。古い品でも手入と取り合せさへよければ豊かな趣味から持味を生かします。決してきたないらしい感じはあたへません。

不潔な場合によると不純な感じともな

り、みだりがましいすきをさへあたへかねません、つまり、悪が近寄り易いすきを作るものは不潔にあります。近頃路ぼうを見ますと不潔な感じにどぎつい化粧をほどにした若い女性をむやみに見かけます、みだらな、しかも不思議に官能的なものを感じさせて、頭から足の先まですきだらけです。私はこのへんに敗戦四年後の、せいりされない日本の情ない姿を見出して涙が出るほど若い娘さんをいとしみます。そしてその親達を思ひ家庭を思ひます。

戦争には敗けても愛する日本は澤山に良いものを持つてゐます。決して見くびつてはいけません。いつも申す事です。が女性はい世の花です、花には匂ひがなければなりません、若い女性、殊に處女は開きかける花でもあります。その香氣も亦新鮮な空氣をより清純にする使命を含まなければなりません、人世を美化し純化する乙女の命をかぎりなく禮讃してこの稿の筆ををきま

す。(二四、八、三)

バスにのつて

母親は両手に荷物をもつていた。女の子は母にのせてもらつてもりで、袖をひつぱつた。女車掌が車から降りて抱へるやうに車にのせてくれた。女親は軽く禮を言つて一番後の空いた席にかけた。子供はすぐ窓外の通りすぎる風景に氣をひかれてゐる。子供にとつては至る所がわが家の明るさであつた。やがて目的地につくと、子供はよろけながら女親の袖につかまつて後についていたが、降り際に自分でステップに足をかけ、横をむくと、大きな聲で

「サヨナラ、サヨナラ」と女車掌に手を振つた。自然に出た明るい心の贈物にとつた女車掌はめんくらつた。車は走り出した。俄かに氣付いた彼女は、首を出す小さい姿に手をふつて心からの挨拶をかへした。残暑の街頭に、人の心を爽やかにしたバス風景の一つである。

ソ連の子供の悩み

佐藤 密雄

子供には、外に子供ながらの社會生活があり、同時に家庭的には、両親の愛に生きる個人生活がある。此の社會生活と個人生活が衝突しない時は、子供は幸福だが、一方を生きる爲めに他方を失はねばならぬ様な場合が來ると、最大の不幸に陥る。理性よりも感情に生きる子供は、兩者の價值に上下を見出すことが出來ないからである。子供の一番幸福な時は、子供の社會生活を、家庭愛が勇氣づけて居る時である。子供にはまだ、不幸を不幸として、センチメンタリズムで愛撫する力はない。米誌ボストの四月號に「ロシアの子供は如何にして宗教を失つたか」と言う記事があった。ニナ夫人がベルテヤンクスで経験した話である。近頃、引揚者から聞いた話でも、ロシアでは、宗教は公式的に否定され乍らも、教會や家庭の中に、ひそやかに實在する様である。此れは、共產主義國家としては矛盾である。此の矛盾をなくするには、此れから育つ子供に宗教をなくするにある。其處で、此のニナ夫人の記事の様なことが起るのである。此に依るとロシアの學童達は、共產黨クラブ

を造り、「若きレエニン主義者」、「尖銳隊」の氣魂に燃えてレエニン其の他の先覺者の名を「人民の護り」と叫びつつ、隊伍を組んで教練を受け、町を行進して、其の熱情を高め週に三回の指導講義をきくのがすまいと努めて居る。私は此を讀んで、卒然として「ヒットラー少年隊」の話を思ひ出したが、此の感慨は必ずしも不當ではない様である。

共產主義の家庭に育つた子供達は、其の父母達と同じ思想を實踐する歡びにひたつて居る。然し多くの子供は、家屋の中に宗教を持つ両親の子供達であつて、彼等は其の親達と同様に私的な家庭は家庭としての生活感を持ちつゝ、他方小學校のクラブでは公的な感情で、「新世界の建設者」、「レエニンの若き後繼者」の意識を持つのであり、世界共產主義國家の「先銳隊員」として、全世界の少年達を戦ひ取る情熱を心から感ずるのである。然し、此様な二重の感情的生活を許さない鐵の規則はやがて此様な子供達に精神的革命の嵐をもたらす。

或る日の共産黨クラブの講義は、宗教の害惡についてであつた。「宗教は人民の敵である。人民を貧乏と無知にさせて置くま樂である。知識を與へず人民を盲目にして居る」と、尊敬する講師に言はれた時に、滿八歳から十歳位の少女達の胸はとどろいた。「若し君達の家に、宗教的な書物や聖像があつたならば焼き捨てねばならない」と叫ばれた時、先づ少年達は、ひそかに其の家庭を想起した。「諸君の家庭に聖像のあるものは、手を上げ給へ」と言はれた時に、子供達は無言にどよめき、あたりを見まわした後に、大部分が手を上げた。私は此の時の子供達の氣持には恐らく、堪えがたい強制が感じられたと考へる。ニナ夫人の記事に依れば、講師の話は進行して、やがて「若きレエニン主義者よ！君達の大部分は宗教の霧の中に閉されて居る。かゝる家庭は闘士を作り、新世界の建設者を出すには不當である。かゝるものと假借なく戦はねばならぬ。君達は、兩親に、聖像を捨てる様に言はねばならぬ。若しそれを兩親たちが拒んだら報告せねばならない。若し此を怠つたら、不名譽にも、クラブから追放である」と、聲を大いにして命令が下つたのである。

ニナ夫人に、此のことを話した子供は、幸ひにも共産主義の兩親を持つて居たが、他の大部分は信者の家庭の子供であつた。ペルデヤンクスと言ふ所は、大がいの家にはそ

の一角に小さな祭壇があつて、聖像がかけられ圓いランプに燈火が點ぜられて居た。此の様な家庭の子供に取つては父母に此の祭壇を捨てることを要求することは、神の愛でこよなく自分を愛して呉れる父母に反逆することになる。「新世界の闘士」となり「建設者」となることは、少年少女の英雄的な輝かしい希望だが、こよなき父母の愛を受けることも、子供の天與の現實的恩恵である。子供達が英雄的な感情に輝きつゝも家に近づくに従つて足取りが重くなるのも當然であつた。

クラブの規則、「ガイド」の命令は鐵の規則であるし、他方、壁にかこまれた家の内は、ひそかに神の愛をたゞへる溫い家庭であつた。クラブの鐵則と家庭の愛情の間を、子供達は、小さい胸をいためまどつたのである。

ボストの記事は、ステブンと言ふ十歳の少年の心理的悩みの經過と行動を克明に記して居る。此の少年は、此の世で、最大の權威は兩親だと考へて居たが、然し新たなクラブの權威に接し、今ま、「若きレエニン主義者たる爲めに」と言ふ命令には、大なる感激を覚え、宗教を捨てることを兩親に申込もうと決心した。勇躍、家に向つたが、家に近づくに従つて足は重くなつた。複雑な氣持で家に歸ると、母は彼のスカーフを取り、其の冷い手を暖い手でこすつて

呉れた。老の手で、彼の靴下をつくろつていた信心深い祖母は、聖像の下に半白の頭を持ち上げて、微笑んで呉れた。此れを見ては、此の母や老母の魂である神を否定出来やうか。この「若きレエニン主義者」の熱はその體から蒸發して行つた。母のととのへた愛の寢床に其の夜は過ぎたものゝ、明朝は、家を出ても學校へは行かなかつた。クラブの集會に出れないからである。然しクラブは三回以上缺席すれば除名される。幾度か心を變轉した結果再び彼れは「若きレエニン主義者」の意識を取戻し、「神はない」と決心した。家に歸つて、父母と祖母の留守を幸ひ、聖像の畫をストーヴに入れて燃えるのを見たが、神の怒りも異變も起らなかつた。そこで、今一つあつた木彫の聖像を引降して屋根裏へかくしてしまつた。

宗教は取拂つたが、心はさえなかつた。やがて母と祖母が歸つて、聖像の盜難を叫び、祖母は聖像盜人を怒り、母は黙して床上に伏してしまつた。父が歸つた。聖像のかゝつて居た壁を見つめて何かを考へて居たが、やがて、子供の室に來て靜かに聞きたゞした。子供は亂れた心から脱れる様な氣持ですべてを告白したのである。父は何も怒らなかつたし、母は子に代つて神々にゆるしを乞ふた。父は屋根裏の聖像を、戸棚の中に納め、外から見えない様に堅くとさした。彼は一應の宗教追放をなした事になつてクラブへ出たが、然し闘士的元氣はなかつた。

祖母は閉された聖像を心で祈りつゝ間もなく死んだので父母は夜ひそかに僧侶を呼んで葬つたが、其の時に彼も祈りを捧げた。すると、翌日クラブに出た彼は、除名の宣告を受けた。昨夜の祈が知れたのである。除名された彼は家には歸らなかつた。幾日かかつて、父母や友人達が彼れを町はづれの空家から探し出した時は、寒さと飢えとで重態に陥つて居た。病氣は仲々回復しなかつたが、友人が一日訪ねて來た時に彼は重い口付で言つた。「聖像を焼いたが、神も兩親も僕を怒らなかつた。其の様な寛大な神を、私はどうしても心から拂除けられない」と。其れに答へて、共產主義者の家庭の子である友は「神を拂ひ除けられない君の心の中に、眞の神が居るのだ。拂ひ除けんとしても立去らないその心の中の神を守り祈り拜することは、如何なる命令も及ばないことだ。僕もとは言はないが、皆さうだ」と語り聞かせたのである。其の日から、少年の病氣は快方に向つた。

共產主義者でない私共から見ると、ロシアの子供の多くは此の様な惱みにさらされて居るのではないかと思ふ。そして、兩親のない兒や、兩親の手許に居ずして、國家の育兒所に育てられて居るものゝ方が、生活感情の單一性と言ふ點で、むしろ幸福なのではないかと思ふ。子供の爲めにも、家庭愛を否定しない社會を造りたいと希ふのである。

◇會友の聲◇

◇諸事困難の折、皆様の御苦勞は大抵のことではないとお察しします。遠慮なく申しますと、編集も以前より多角的に、客觀性を具えて清新な感じが出ました。特に五月の表紙裏へ「宗教病」をのせられた勇氣には感服しました。キリスト教、淨土教は純愛や他力本願を強調するので、ともすれば自讃、自己陶醉に陥り易いようです。今後あらゆる角度から切りこんで頂きたい。(静岡・高瀬磯)

◇毎月拜讀させて頂いていますが、仲々佛の有難味が分らなくて私は餘程、業が深い人間です。妻が永い病の上、家は立退を迫られ、無理して小さな家を建て本當に生活は火の車です。しかし小生以上に苦しい人々も世の中には澤山あると思ひ今一生懸命で働いています。御指導を願ひます。(新潟・徳田録次郎)

◇たまたま高橋氏の机上にあつた淨土誌を手にして、とても氣持のいい、宗門雜誌中には珍らしいすつきりした編集がしてあるのに氣が引かれて、御厄介をかけることになりました。戦前は山田さんの禪の生活に御厄介になり大變勉強が出来ましたが、今後もどうか勉強させてやつて下さい。私の第二詩集出版の話が進んでいます。(京都・町田トシコ)

——毎月各地の會友の方々からいろいろとお便りが頂けて、私たちは微力ながらも力が喚び起されるのを感じる。苦しい世の中にあつても、人生眞實の鈴の音とともに一步々々を歩んでゆきたい。民主とか大衆とか言ふ言葉が、衆愚でないためにも、一步より一步と高く進みたいです。(係)

芝園だより

◇野の路に立てば、夕の雲にも初秋の影は既にひそやかに感じられる。しかし巷風の街には残夏の光がなほ熱を含んでいる。虚脱と混亂は次第に定まつて來たが、苦惱は却つて内に深まつて來ている。深刻なものが世の底に胎動しているとき愈々勇氣をもつて信仰者の道を打ち出してゆきたい。

◇想えば昨秋、私たちが編集に當ることになつて丁度一年。いま第二の歩みへ。更に想ひ新たに清爽の氣を漲らせてゆくつもり。切に御後援下さい。淨土はよくなつたと言う。いや、むつかしくなつたと言う。共に本誌に寄せる眞實の聲と有難いが、唯通俗的低さにはありたくない。

◇吉田・佐々木兩先生のつよいての御執筆いつも乍ら感銘ふかい。宗教を奪われた子供のなやみ、佐藤氏の提示された問題は、カーテンの向側、子供の問題に止まらな

い。今月も軽い讀物の中に人生の味を汲みとりたい。願ひて次の一年を光あらしめよう。(藤田)

行末のことおもはるゝ端居哉

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 九月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿四年八月二十日印刷
昭和廿四年九月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

爽秋におくる浄土トラクト

初めて書かれたお十夜の話
読んですぐ分るお十夜の話
史實に基いてのお十夜の話

藤田寛雅著

お十夜の話

一部四圓
送料六圓

企劃發表だけで早くも豫約希望相次ぐため、申込
は至急にお願いします。

九月下旬、出来申込順に送本します。

二百部以上申込の方は希望により寺名刷込みに應じ
ます（九月末日まで申込み願います）

送料五〇部まで二〇圓、百部以上當方負擔。

申込所 東京都港区芝公園五の一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

佛教論叢第二輯

菊版一三〇頁
一部一〇〇圓（送料八圓）

第二回宗學大會の研究成果を盛る待望の論集
秋灯の下、ふかき思索をさそう良書。

—主なる内容—

選擇集の阿彌陀佛觀

文博 山本 空外

共同研究—佛身佛土論

小澤勇貫 藤原了然 田中順照 佐藤密雄

名山歴代爾書の研究

鈴木 靈眞

稱名念佛の特色

石井 教道

念の意義

文博 山口 察常

浄土教は大乗佛教の傍流か

文博 大野 法道

華嚴經の時間論

佐藤 賢順

起請文に現はれた中世信仰

藤原 弘道

宗教團體の紐帶

三枝樹正道

殘部僅少、この際お申込下さい。

申込所 東京都港区芝公園五の一〇

浄土宗教學院研究所

振替東京五九〇一九番